

USB-5 試聴記 (3)

—高音質ソフトのメモリーへのコピー—

上新電機での試聴会においてインフラノイズ社の USB-5 の開発方針として、単に音の分解能とか、そういったオーディオ的発想を敢えて避け演奏の雰囲気、演奏者の思いなどを再現する方向で開発したとのお話がありました。実際に聴いてみますと単にオーディオ的な感覚で評価しきれないところがあります。

そこで今回は、音源を選んで、音楽の感動がどう伝わってくるか、演奏家の心が伝わってくるかに迫ってみることにチャレンジしてみました。

音源はカラヤン・メモリアル・コンサートシリーズの小澤／ベルリンフィルのチャイコフスキーの 6 番のベルリンフィル本拠地の大ホールの 2008 年 1 月 23 日録音の NHK の BD 盤とウィーン楽友会館の 2008 年 1 月 28 日録音で GENEON の DVD 盤です。同じ曲がホールの違いでどう変わるかに興味があります。また、同じ小澤がサイトウキネンを振った幻想の NHK の DVD 盤も対象です。これらを PC に取り込んで、USB-5 から再生し、BD や DVD の映像で視覚的に確認した会場の雰囲気や指揮者と楽団員の熱い演奏ぶりが、USB-5 からの音だけで汲み取れるかどうかを感じ取ることになります。さらに、雰囲気の違うものとして、延原武春指揮コレギウム・ムジクム・テレマンが夙川カソリック教会で演奏したヘンデルのメサイアの BS 録音も聴いてみることにします。

以上は視覚と音質に頼ったものばかりではないと言われるかも知れませんが、対局的に音のグレードはともかく、名演奏と言われたゴールドベルク／ヒンデミット／フォイアマンによるベートーベンの「弦楽 3 重奏のためのセレナーデ」の SP からの復刻 CD をリッピングして USB-5 から再生してみることにしました。

チャイコフスキーの 6 番の 1 楽章では、視覚的に確認した結果が、画像のない USB-5 からの再生でも、冒頭の低弦やファゴットの出だしからチェロへの受け渡し、途中のティンパニの連打、トロンボーンの咆哮、流れるような弦の主題などが目に浮かびます。サイトウキネンの幻想の 5 楽章でも同様に楽器の受け渡しや木管の音のテクスチャー、大太鼓や鐘の打撃音が良くわかります。少なくとも、音像が曖昧になりがちな一般の CD を再生したときよりは鮮明に再生されます。

なお、2008 年 1 月 23 日録音の BD 盤と 2008 年 1 月 28 日録音の DVD 盤では、盤を回して聴くときは、圧倒的に BD 盤の音質は優っていたのが、USB-5 に移すと逆転してウィーン楽友会館の方の響きが良く、弦も流麗に流れます。これがホールの響の違いに由来するのかどうか大いに興味の湧くところです。

教会録音のメサイアでは、視覚的に確認された残響時間の長そうな演奏の場が再現できますし、倍音の豊かさを損なっていません。

「弦楽3重奏のためのセレナーデ」のSPからの復刻版では名演奏と謳われた由来が、人生の深い哀しみ、悩みと慈しみを現した演奏ぶりがはっきりと浮かび上がってきます。以上、極めて客観性のない表現で申し訳ないのですが、これ以上に言いようがないということで勘弁してほしいと思います。

以上